



夜のシマウマ

[SFP0144]

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

11月21日のおはなし「夜のシマウマ」

その店で働き始めてからもう5年になるだろうか。青年は寡黙で、いつも伏し目がちで、話しかけてもあまりはっきりした返事をしないので寄りつきにくいイメージがあった。酒を勧めても、申し訳程度に口を付けるだけで、付き合っただけじゃなく飲むわけじゃない。店中が盛り上がり大騒ぎになっているようなときにはできるだけ目立たない隅の方で、それでも空気を乱さない程度の微笑みを浮かべ、黙ってグラスを磨いている。

そんなことで勤まるのかと思っていたが、意外にも店の常連から青年は受け入れられた。気の効いた返事もいらぬし、笑いを取るためのまぜっかえしなど聞きたくもないような夜に、青年は恰好の話相手だったのだ。客がご機嫌にまくしたてているならば穏やかな微笑みを浮かべて話を聞き、客が怒っているときには精一杯困ったような顔をし、もしも客がどうしようもなく傷つき参っているときには、本気でおろおろして見守った。

それほどまでに完璧な話し相手がいるだろうか？

だから青年と話したい客は店に入るとまっすぐカウンターの右端、青年の定位置の前に陣取った。そんな客にはマスターも声をかけない。他の客もあえてちょっかいを出さない。なぜならそこは、いわば常連全員にとってある種のカウンセリング・シートだったからだ。今日は彼が、あるいは彼女が座った。でも明日は自分が座るかも知れない。その時には、できればあまり関わらずに放っておいて欲しい。青年と自分だけの穏やかな時間を過ごさせて欲しい。

彼女が登場するのはいつも午前1時直前で、終電の音が遠ざかって間もなく。たいていはべろべろになって姿を見せた。マスターに向かって威勢よく声をかけるときもあったが、3回に2回は青年の前に座った。「いらっしやいませ」と呟くように青年が言うと、「なにわせて？」と彼女が声を張り上げて聞き返す。いつものやりとりだ。青年はうなずき「いらっしやいませ」と同じ調子で繰り返す。「『いらっしやいませ』でしょう？ なによ『らさわせ』って。何年働いているのここで？」

そのタイミングで青年はぴかぴかにふきとった灰皿をびたりと彼女の前に置き、やや手前にコースターをぴしりと置き、彼女の一杯目のドライ・マティーニを用意し始める。青年が動き始めるとそれはちょっとしたみものだった。無駄なく流れるようにドライベルモットをわずかに注ぎ、何かの線をなぞるようにドライジンのボトルを動かしミキシンググラスの氷を揺らす。軽くステアしてグラスにつぐとオリーブをそえて、グラスの足元をふき取るとコースターの上に吸い付くように置く。

わずかな時間ではあるが、間違いなく彼女の口がとまる瞬間でもある。青年は決してパフォーマンスめいたことはしない。ただ驚くほど無駄なく優雅にグラスを満たし、客の手元に届ける。グラスに口を付けた後の客は、少しだけ穏やかな口調になっている。

「今日ねエルメス行ったんだ」彼女もそんな調子で話し始める。「銀座のエルメス。何しに行ったと思う？ ね、何買ったと思う？」青年は微笑み、さあ、というように首を傾げる。「残念でしたー。ブブー、何も買ってませーん」青年は何も言っていないのに彼女はそんなことを言う。

それから彼女はエルメス本店の屋上でどんなに風変わりなアートの展示をしているか、熱心に語る。自分が高所恐怖気味だということ、馬の彫刻をたたいたら安っぽいベコベコいう音がしたということ、あの部屋に住みたいということ、聞かされても何が何だかさっぱり要領を得ない話ばかりだが、青年はときおり彼女の視線を注ぎ、ふと微笑んでうなずく。

「高いところは怖いんだけどね、そこから見る銀座は見たこともない風景でね。じっと見てた。ずっと見てた。そうしたら向かいのビルの窓辺にね、いたんだよあいつが」高校生の頃、中庭の向こうの教室に見えたのとおんなじような姿勢と顔つきで、と言うので店内の常連は昔の彼氏の

話だとわかる。けれど青年はそんな風に理解した表情は出さず、ただ真剣に話に耳を傾ける。若すぎて傷つけ合った話、そのころ二人で見ていた夢のこと。どこかで聞いたような思い出話なのに、青年はそんなことがこの世にあるのかと言わんばかりの驚いた表情で聞き入る。

「ねえ、そういうの体験したことある？」そう聞かれると青年はとんでもないという顔つきで首を横に振る。そんな特別な経験はしたことはありません。「うそだー。意外とそういうシャイなとこ、女の子に大人気だったんじゃないの？」男子校ですから、そういうのはありませんでした。「ふーん。ひょっとして男の子の方が好きなんだったりして！」

青年は黙って微笑む。

「ああ、だめだめ。だってゲイで根暗なんて水商売としては最悪じゃない？」青年は微笑み、グラスをきゅっきゅっと磨くだけだ。「あたしは好きだけどね」恩着せがましく決めつけて女は出ていこうとする。その時、意を決したように青年は口を開き、初めて自分から語りかける。「ぼくがどうして夜のシマウマと呼ばれているかお話ししましょうか」

そして青年は私に目を注ぐ。あの頃、教室の窓辺の席から静かに見つめていたところと同じように。私も黙って青年を見返し、私が夜のシマウマの呼び名を付けたその姿を見つめる。

(「シマウマ」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんが。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

夜のシマウマ

<http://p.booklog.jp/book/39407>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39407>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39407>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.